



のんき者と王様

森田草平

ハサンはお父さんが亡くなつてから、急にお金が自由になり出したので、毎日、澤山の友だちを集めては、酒盛を催したり、物見遊山に出かけたつたりして、遊んでばかりりました。さうして面白をかしく、われを忘れて日を送つてゐるうちに、或時ふと気が附いて見ると、さしも金銀財寶を山のやうに積

んだ父親の遺産も、いつの間にかすつかりなくなつて、後にはもう何一つ残つてゐませんでした。ハサンは悪い夢から覺めたやうに、ほんやりしてゐました。が、さうしてもゐられませぬから、それまで一緒に飲んだり騒いだりした友だちを訪ねて、内情を打ち明けた上、自分の助力を頼んで見ました。ところが、相手は顔を背向けたまゝ、こちらの話を聞いてくれませんでした。聞いても、返辭をしてくれませんでした。

甚しいのは、居留守を使つて、空關から追ひ返すのをごさいました。生まれて始めてこんな目に遭つたハサンは、手の裏返すやうな友だちの冷淡さに呆れ果てました。呆れ果てたあけく、つくづく世の中がいやになりました。で、がつかりしながら、とほく家へ歸つて来て、このことをお母さんに話をする時、お母さんは真面目な顔をして、

「あなたも身に沁みてよく覺えていらつしやい。世の中といふものはさういふものですよ。」と、懇々息子に云ひ聞かせました。「あなたにお金のある間は、やい／＼言つてそばへ寄つて来る。お金になつた日には、知らぬ顔をして構ひつけないと言ふのが、當世の人情ですよ。」

「はい、私もつくづくさう思ひました。」

「そこへ気が附けば、それで宜しい。」かう言つてお母さんは、自分の部屋へ歸つて、戸棚の奥から大きな金包みを三つ取り出して來ました。そして、それをハサンの前に並べながら、かう言ひました。一かねてかう言ふこともあらうかと思つて、私はお父さまがなくなつた時、財産を二つに分けて、半分だけあなたに渡し

て、後の半分は私がしまつて置きました。さあこれを上げるから、この後はきつと心を入れかへて、これまでのやうな事のないやうになさい。」

ハサンは自分の不心得から一文なしになつたと思つてゐたのに、母親のお蔭で又元の通りの金持ちになることが出来たので、もう夢かとはかり喜びました。そして、母親にあつく感謝しながら、以來はきつと心を入れかへて、これまでのやうな失敗は斷じて繰り返さないと約束しました。

が、生れつき呑氣者のハサンは、お金が入ると、再び前と同じやうに日夜酒盛や物見遊山に耽り始めました。たゞそれからと言ふものは、決して近所の友だちや知人とは交はらない。夕方になると、さやう、東京で言へば日本橋と言ふやうな、大きな橋の袂へ出て待ち受けながら、通りがよりの旅人を押まへては、自分の家へつれて來い／＼いたしました。そして、その旅人を相手に飲んだり騒いだりして遊ぶのでございませぬ。つまりハサンが心を入れかへると言つたのは、信用の出来ない友だちとは一緒に飲まない、知らない旅人とはかり飲むと言ふことでした。が、いくら知らない旅

人でも、長く一緒に酒を飲んでをれば、友だちになつてしまふ。友だちになれば、信用が出来なくなる。で、ハサンはどんな旅人でも、一晩は一緒に酒を飲んで泊めてもやるが、二晩とは泊めてやらない。明くる朝になると、「歸つてくれ。」と言つて、玄關から追ひ出すやうにいたしました。そして、その後は、途中で逢つても知らない顔をして、横を向いて通りました。

かうしてハサンは一年間程暮しました。で、或日の夕方、いつものやうに、誰か来さうなものだと思ひながら、橋の上に立つてゐると、そこへその國の王様が、従者を二人つれて、三人とも旅人のやうに變装してお通りかゝりになりました。一たい、その王様は、その國の歴史でも有名な、慈悲深い、賢明な王様で、時々かういふ風に旅人に變装しては、一人二人のお伴をつれて市中を御遊行になりながら、下々の人情風俗を視察して廻られました。ところで、ハサンは、それが王様であらうとはもとより知る由もないので、主従らしい三人の姿を見かけると、すぐにその側へ寄つて、「いかゞです、今晚私どもへ入らして、音楽でも聴きなが

ら、一口召し上つて、この良夜を愉快にお過ごしになる氣はございせんか。」と誘ひかけました。

王様はかね／＼人民と直接話をして、よく下々の事情を探りたいと思召していらしたのでございませうから

「いや、それはどうも御親切に有り難う。」と仰つて、すぐにハサンの招待に應じられました。

で、ハサンは先に立つて三人の客をわが家へ案内しました。これが王様だとはもとより知らないが、人品風體から言つても立派な人物だと思ひましたから、奥の間へ通して、銀の燭臺をともしなれた上、焙いた鶯鳥だの、胡桃だの、獅子の肉の揚けたのだの、鯨の肉だの、西瓜だのと、山海の珍味を並べ立て、一生懸命に饗應しました。それから家中の一番美しい腰元を連れ出して、琵琶を弾かせて、その撥音につれて歌を唄はせました。その聲は銀の鈴のやうに美しくございしました。王様もそれが大層お氣に入つたと見えて、何度もその女に歌を唄はせては聞いておいでになりました。

ハサンは紅石のやうに赤い色をして、麝香のやうに高い香をもつた葡萄酒を持ち出して、玻璃の盃を王様の前にすゝめ



ながら、

「どうかこの盃でもう一杯飲んで下さいまし。今夜別れてはもう二段とはお目にかゝれないのですから、別れて後も心残りのないやうに、これで一つぐつと乾して行つて下さいまし。」と云ひ出しました。

「どうしてそんな悲い事を言はれるのですか」と、王様は不審さうに聞き返されました。

「かうして今夜かういふお饗應になつた上は、あなたのお名前を伺つて置いて、いつれ近いうちにもう一度お禮に上らうか、それともお招きをしようかと、今も思つてゐるところなんですよ。」

「いやもう、お禮に来るだの、もう一度あなたがたのお饗應に預るのだといふことは、まつびら御免ですよ。あなたがたに限らない、どなたとでも、私はお友だちになるのが大嫌ひ

でございますからね。」

「これは又異なることを承はるものだ。」と、王様は鷹揚に微笑しながら、改めてお尋ねになりました。「どうしてあなたはさういふやうなお考へになつたのでございませうか。」

そこでハサンは、自分が友だちを信用しなくなつたわけを、これ／＼かう／＼と委しく語つて聞かせました。それを聞いて王様は、腹をか／＼へてお笑ひになりました。

「いや、それは御尤だ。さういふことなら、あなたが私ともと友だちになるのは厭だといはれるのも御尤ですよ。」

かういつて王様は、しばらく首をかきつけて考へてゐられましたが、やがてハサンに向つて、「どうです？ あなたは、日ごろから何かかうして貰ひたいとか、又はかうなつたらよからうとか思つていらつしやることはございせんか。」とお尋ねになりました。

「いや、それは幾らもありますよ。」と、ハサンは言下に答へました。「まづ第一に私がどうかして貰ひたいのは、お隣りの寺に住んでゐる糞坊主ですよ。私がいゝぐあひに朝寝坊をしてゐると、それを邪魔するやうに、わざ／＼早く起きて鉦を

叩きをる。尤それは向うもお勤だから仕方ありませんがね、

どうも強慾で吝嗇で、召し使ひの女を四五人も使つて、全く近所の憎まれものでございませう。もし私にあゝ云ふ人間をどうにでもする権力があつたら、第一番にあの坊主を千の首刑に處して、寺を放逐してやりたいと思つてゐますよ。さうすれば私も安心して朝寝坊が出来るでせうからね。」

「さあ、そのお願ひもきつとかなふ時期が来るでせうよ。」かういつて王様は、相手に知られないやうに、そつと懐から麻酔劑を出して、それを、自分の前の盃の中へお入れになりました。そして、それをハサンに勧められました。ハサンがそれを受け取つて、ぐつと一口に飲み乾してしまつたかと思ふと、急に人心地がなくなつて、床の上に倒れてしまひました。王様は立ち上つて、女關まで出て行かれました。かねて見え隠れにお伴をして、王様の身を守護してゐる兵卒どもが、四五十人、そこに屯してゐましたので、それ等の者に命じて、ハサンを輿の上に昇載せさせました。そして、酔つて正體のないハサンと一緒につれながら、宮中へお歸りになりました。それからそのハサンを御自分の寢室へつれて行つ

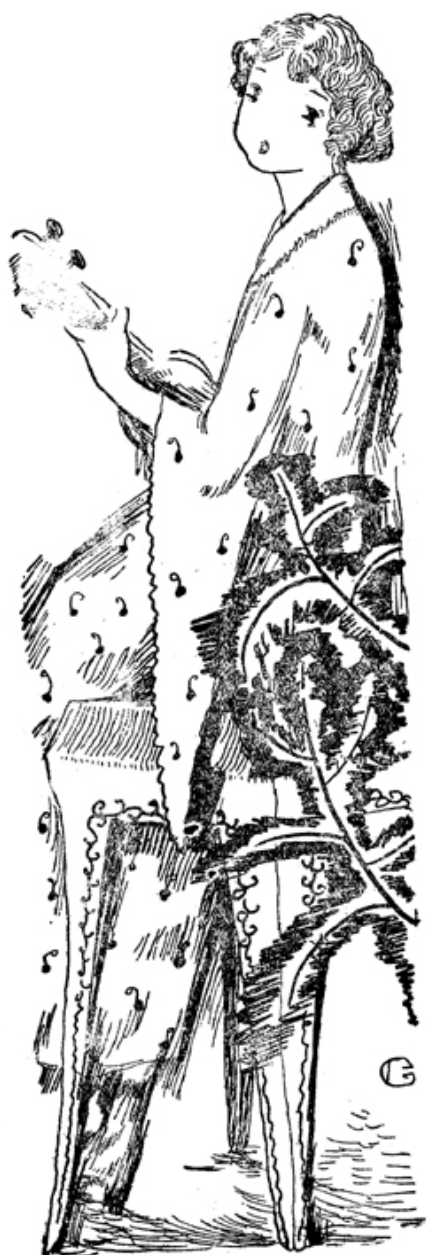
て、いつも御自分のおやすみになる寢臺の上へ寝かせるやうに御命令になりました。それから奥御殿に仕へてゐる老女やこしもどどもに向つて、

「明日の朝この青年が目覚したら、お前方は俺にいふ通りにこの青年にものをいひかけて、俺にしてくれる通りにこの青年にもして上げなければいけないよ。つまり、この青年が俺だと思つて仕へさへす。ばいゝのだ。分つたか。」と、仰せられました。それからなほ宰相だの、大臣だの、侍従だの、

警視總監だのと言ふやうな、朝廷の主だつた人々をお召し寄せになつて、

「お前方もこの青年が目覚したら、國王として彼に臣禮を取り、彼の命令することには、何事によらず一々服従してくれないければいけないよ。」

と命令を傳へられました。一同は謹んで陛下の御命令に従ふ旨を奉答いたしました。そこで王様は帷幄のうしろへ這入つて、お寝みになりました。



あくる朝、ハサンは、王様の寢臺の上で目を覚めました。そして、きよとんとしたやうな顔をしながら、自分を取り巻いてゐる多くの侍従や腰元どもの姿を見やりました。彼等はハサンの前に跪いて、頭を俯れてゐるのでございました。その時一人の腰元が前へ進んで、

「陛下、もうお目覚めでいらつしやいますか。表御座所の方では、一同陛下のお出ましを待ちかねてをります。」と申し上りました。ハサンはそれを聞いて鼻の先で「ふん。」と笑ひました。そして、横を向いてしまひました。が、今度は金や群書を塗つた壁だの、刺繍した帷帳だのが眼につきました。その他金銀の皿や、陶器や、水晶の壺や、香爐や、燭臺やと言ふやうなものが、目眩しいやうに、すうりと並んでゐました。それを見ると、彼は急に目がくらくとするやうな氣がいたしました。そして、

「一たい俺はまだ夢を見らるのちやないか知ら？ それとももう死んで天國へでもやつて来たのかな。」と、口の中で呟

きました。が、見廻してゐるうちに、だんく不安になつて顔を、胸の上へ垂れたまゝ、ぢつと、考へ込んでしまひました。それから又眼を開いて、交るく自分の手を見てゐましたが、いきなりそれを口へ持つて行つて、がぢりと自分で自分の指を噛んで見ました。彼は「はす「あ痛ッ。」と大きな聲を擧げて叫びました。全く眼の玉の飛び出るほど痛かつたのでございます。彼は自分ながら腹が立つて來ました。そこで自分の前に立つてゐる腰元の一人をそばへ喚びました。すると、その女は二三歩前へ進んで跪きながら、

「陛下よ、御川でいらせられますか。」と丁寧に尋ねました。

「お前の名は何と言ふかね。」と、ハサンはきいて見ました。

「はい、私はセンジュレーと申します。」

「ふん。」と、ハサンは少しへた後で又尋ねました「うお前は俺がどう言ふ人間で、今どう言ふ所に居るか、知つてゐるかい、知つてゐたら、そこで言つて御覽よ。」

「はい、陛下はこの國の國王でいらせられます。そして、たゞいまは寢臺の中の御自分の臺に腰かけていらつしやいます。」と、腰元は眞顔で言ひました。



「あれ、あんな事を言つてやがる。」と、ハサンは心の中で考へました。「しかし、俺はもう何が何だかさつぱり分らない。俺はもう馬鹿になつてしまつたのかな、いや、どうも俺はまだ癡てるらしい。それにしても、昨夜来たお客は何者だらう？ きつとあれは悪魔か魔法使ひに違ひないよ。そして、俺をこんなに馬鹿にして遊んでやあがるんだ。」

その間王様は、始終帷帳のうしろへ隠れてハサンの方から

は見られないやうにしながら、ぢつと他の様子を探つてゐられました。ハサンは侍従長の方へ向き直つて、彼を自分のそばへ喚び寄せました。すると、侍従長は彼の前へ進んで、床に額をつく程低く頭を垂れながら、

「お、わが國王陛下よ……。」と言ひかけました。

ハサンは相手の言葉を引き取つて、

「一たい誰が國王陛下なんだい？」と性急に聞き返しました。

「はい、あなた様でございます。あなた様がこの國の國王陛下でいらせられます。」と侍従は落ち着き拂つて言ひました。「お前は俺を瞞さうとしてゐるな。」と、ハサンはさも憎々しく侍従長の顔を睨みつけながら言ひました。それから他の侍従を前へ呼んで尋ねました。「おい、お前も先の世で地獄の火に焚かれまいと思つたら、どうか俺に本當の事を言つてくれ。俺は本當にこの國の國王陛下なのかね。」

「さやうでございます。」とその侍従はきつぱり答へました。「たゞいまの所では、あなた様は確に國王陛下で、この國の領土と人民とを統率する方でいらせられます。」

それを聞いて、ハサンはもう見るもの聞くもの悉く分らなくなつてしまひました。そして一人心の中に呟きました。

「どういふものが、俺は一晚のうちに國王陛下になつてしまつた。昨日まではたゞの商人の伴に過ぎなかつたんだが、今日は一國を支配する國王になつてゐる。いや、どうも俺には何が何だかさつぱり分らないよ。」

實際、考へれば考へるほど、ハサンには譯が分らなくなりました。で眼をばちくりしながら黙つて坐つてゐました。

その時一人の侍従が彼の前へ進んで、

「今日もよい日で恐悦に存じ上げます。」と言ひながら、彼の足下に一足の靴を並べました。それは金糸や銀糸の織物で拵へて、寶飾を鏤めた、見事なものでございました。

ハサンはそれを手に取つて、長い間珍らしさうに眺めてゐましたが、やがて何も言はずにそれを袖の中へ隠しました。それを見て、侍従はびつくりしたやうに云ひました。

「陛下、それは足に穿くものでございます。」

「なるほど、これは足に穿くものだつたね。」と、ハサンはきまりの悪さうにそれを袖の中から取り出しました。「どうもあんまり綺麗なものだから、かうして置くと汚れるかと思つて、ちよつと懐へ入れて見たのだよ。」かう言つて、彼はその靴を足に穿きました。間もなく又一人の腰元が黄金の盥と銀の水注しとを持つて這入つて來ました。そして、彼の手に微温湯を注ぎかけてくれました。かうして顔を洗つてしまふと、侍従どもは彼を案内して、國王の先祖の御靈が祀つてある禮拜堂へつれて行きました。彼は祭壇の前に立ち立つたものゝ、どうしてお詣りをしたものが能く分らないので、家でしてゐる

たやうに、拍子を打つて、右を向いたり左を向いたりしながら、何遍も平伏いたしました。そして、心の中に考へました。「いや、俺はどうしても國王陛下に相違ないよ。國王陛下でないとするれば、これは夢だが、夢の中で物事がかうはつきりしてゐる筈はない。第一、さつき指を嚙んで見た時も、あんなに痛かつたではないか。」

かう言ふやうに、とうとう自分でも國王の氣になつてしまひました。がいよいよ朝の禮拜を終つて一たん自分の居間へ



引き取つてから、黄金の王冠だの、紫の袍だのと言ふやうな綺羅びやかな國王の衣裳をさせられる段になると彼は又心配になり出しました。で玉座についてからも右の袖を見たり左の袖を見たりしながら、前の言葉を取り消して言ひました。「いや、これはどうしても幻に違ひない、魔法使ひのする業に相違ないよ。」その時一人の侍従が彼の前に跪いて、

「陛下よ、たゞいま宰相がお目通りを願つて、あちらに控えて居りますが取り計らひませう！」と申し上げました。

「あゝすぐこれへ通すがよい。」とハサンは躊躇に答ました。すると扉の隙から白い髪を生やした尤もらしい顔の宰相があらはれて頓首三拜しながらしづくと玉串の方へ進んで参りました。それを見るとハサンは玉座から降りてつかくとそつちへ歩を進めながら其老宰相を迎へようと致しました。「陛下、々々、いかゞ遊ばされたのでございませう？」と、侍従長はあわてゝハサンの袖を引き留めながら言ひました。「たとひどのやうな者が参りませうとも、臣下の者に對して、陛下自ら玉座を立つてお迎へになると言ふことがありませうかまづく元の座へおなほり遊ばしませ。」かう言つて、侍従長はハサンを強ひて元の座へ歸らせました。老宰相はハサンの前に跪いて、眞面目くさつた顔をしながら、その日の政治を一つづつ奏上して、國王の裁決を請ひました。ハサンはそれに對して、かうせよとか、あゝせよとか、好い加減に返辭をしてやりました。すると、老宰相は一々かしこまつて、即座にその通りに執り行ひました。かう言ふやうに、例でも自分の言ふことが通つて、誰も彼も自分に服従されて見るとハサンは再びどうも自分にやつぱり國王に違ひないかと言ふやうな

氣がして来てだん／＼嬉しくなつてまゐりました。その時彼は急に心に思ひついたことがあつたので「警視總監を喚べ、警視總監を。」と大きな聲で喚鳴りました。するとすぐに警視總監がやつて来て、彼の前に跪きながら、「陛下よ何御用でございませうか。」と恐る／＼申し上げました。「あゝ、お前に警視總監か。」と、ハサンは言ひました。「ではお前に申し附けるが、これ／＼かう／＼言ふ街に、ハサンと言ふ者の老母が住んでゐるから、そこへ訪ねて行つて國王からの贈物だと云つて、金子一千兩だけとどけるがよい。言葉づかひなど丁寧にして、失禮なことのないやうにしなればいかんぞ。それからその隣りの寺に一人の坊主が住んでゐる筈だ。あの坊主は不都合な奴だから、一千の笞刑を與へた上、市中を智馬に乗せて——さうだ、顔を尻馬の方へ向けて乗せて、近所の迷惑になる人間の見せしめに市中を引き廻すんだよ。さうして一巡引き廻したら、都の外へ放逐してしまへ。きつと申し附けたぞ。この命令を疎かにするに於ては、俺の方にも覺悟があるから、さやう心得ろ。」

警視總監は委細かしこまつて、國王の御前を退出しました。

そして、即日その言葉通りに執り行ひました。

ハサンは日が暮れるまで政治を執つてゐましたが、やがて廷臣どもを殘らず退出させた上、自分も輿御殿へ引き取りました。そこで彼は一人の侍従を呼んで、「どうも腹が減つてたまらないが何か食べる物はないか。」と尋ねました。侍従はかしこまつて退りましたが、間もなく見事な食卓が彼の前に並べられました。そして、十人の美しい腰元が彼の背後に立つて給仕をいたしました。ハサンはその一人に聞きました。

「一體、こゝにかうして飯を喰つてゐる俺は誰だらうね？」

「あなた様はまきれもない國王陛下でいらつしやいます。」とその女は答へました。

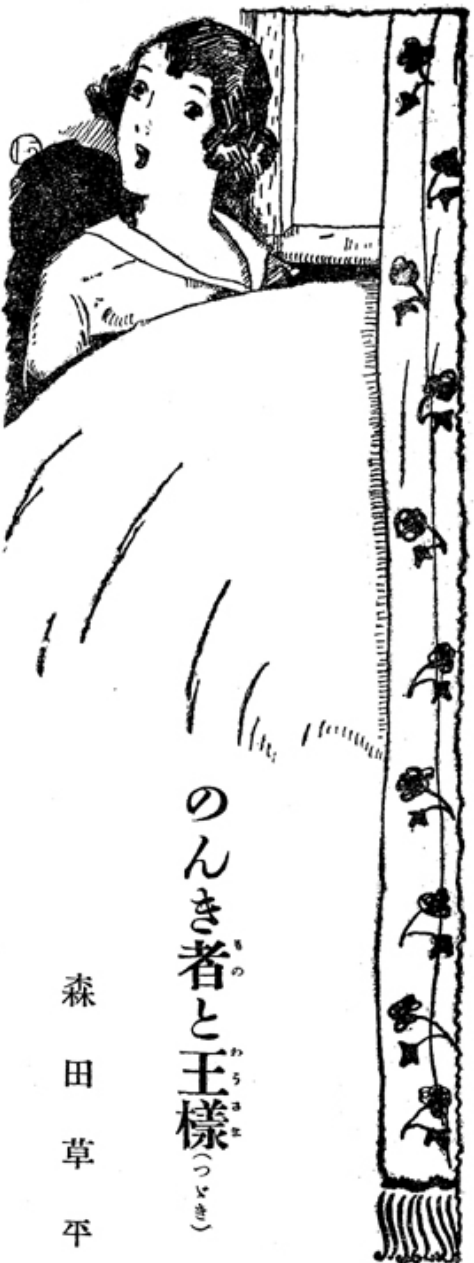
「又俺を瞞さうと思つてやがるな、この馬鹿女め。」と、彼は急にむらく／＼となつて言ひ放ちました。

「お前たちはみんな俺を見て心の中で笑つてゐるんだらう。」

「まあ滅相な。」と、その女はびつくりしたやうに言ひました。「私どもはみんな國王陛下にお仕へして、陛下の御命令とあれば、いつ命召し上げられても仕方のない身でございませうもの、どうして陛下をお笑ひ申すやうなことが出来ませう。」

それを聞いてハサンは又考へ直しました。「ちや、俺はやつぱり國王陛下になつたのか。これで見ると誰に權力をくれてやつた處で神様にとつては大した事ではないんだらうよ。」そこへ又、前よりも美しい十人の腰元が、手に／＼琵琶などの、笛だの羯鼓だのと言ふやうな樂器を持つて出て来て、それを弾いたり、吹奏したり、打ち鳴らしたりしながら、その音に合せて歌を唄ひました。

「いやこれはいかん。」とハサンはわれとわが心を引き締めて云ひました。「どうしてもこれは魔法使ひの仕業に違ひない。俺の所へお客になつて来たあの男が魔法使ひだ。そして俺の厚意に酬ゆるつもりで俺を國王として待遇してゐるんだよ。いやこゝにゐるこの女どもは皆あの魔法使ひの眷族に相違ない。あゝ一刻も早くこんな怖ろしい所から逃れたいものだ。」かうは思ひながらもハサンはやつぱり樂の音に聞き惚れてしきりに盃を重ねました。その時一人の腰元はかねて王様の命を受けてゐたのでそつと盃の中へ魔酔劑を投じてそれをハサンの手に渡しました。ハサンはそれを一息に飲み乾しましたがそのまゝ氣を失つて倒れてしまひました。(つづく)



のんき者と王様(つゞき)

森田草平

三

あくる朝ハサンが眼をさました時には、もう自分の家の自分の寝間に寝てゐました。呑んだ麻酔剤の酔ひがまだ醒めないうちに、彼を輿に乗せて家へつれ戻すやうに、王様が侍従どもに命じて、お取り計ひになつたのでございました。さうとも知らない彼は眼をさまして見るとあたりが眞暗なので「おい、侍従は居ないか、腰元のセンジエーは居ないか。」

と、大きな聲でよんで見ました。

が、誰も返辭をするものがない。彼はいら／＼して来て、「おい、侍従長をよんで来い。誰か居ないか、すぐに宰相をよんで来い。」と、続けざまに叫びました。

お母さんはその聲を聞きつけて、隣りの部屋から飛んで来ました。

「まあお前、何を言つてるんだえ？、氣違ひにでもなつたんぢ

やないか。」と、思はず入口に立ちどまつて尋ねました。

「お前は誰だ？」と、ハサンはえらい權威で母親を睨まへながら尋ねました。

「この狸婆め。苟も國王陛下に對してさやうな無禮なことを申すとは何事だ。一體お前は何者だ？」

「私はお前のお母さんだよ。お前は私から分らないのか。」と母親はおろ／＼聲で言ひました。

「嘘をつけッ。」と、ハサンは一段聲を高くして叱りつけました。

「俺は國王だ。この國の領土と人民とを支配する國王陛下だぞ。お前のやうなけちな母親は持たない。」

「あれ、いよ／＼私に分らないのだ。情けないことに、なつてしまつたわねえ。」と言ひながら、彼女はいきなりそこへ跪いて、祈禱の呪文を唱へ始めました。が、急に又立ち上がつて、わが兒のそばへ寄りそひながら、

「ハサンや、お前はさう言ふ夢を見たのだよ。きつとさうだよ。しつかりおし、しつかりしてゐないと、惡魔につけ入られるよ。あゝさうだ。」と、彼女は何か思ひ出したやうになほ

も言葉をつゞけました。

「お前に聞かせて上げることがあるんだがね。そりやアお前が聞いたらさぞ喜びさうな、好いことなんだよ。」

「そりや何です？」と、ハサンは尋ねました。

「それはね。」と、母親は語りつゞけました。

「國王陛下の御命令だと言ふので、昨日警視總監が隣りのお寺へお出でになつてね、住職を千の答刑に處した上、以後隣り近所の迷惑になるやうなことをしなければよし、するに於ては、いつ何時でも都の外へ放逐すると申し渡してお引き取りになつたんだよ。それからその戻りに私の所へもお立ち寄りになつて、御叮嚀な御挨拶があつた上、陛下の御命令だと言ふので、黄金千兩を私に下けて下さつたんだよ。何とまあ本當に有難いことではないかえ。」

母親の言葉を聞いてゐる間に、彼の顔色は見る／＼變はつて来ました。そして、思はず大きな聲を張り上げながら言ひました。

「あの住職を答刑に處するやうに命じたものは、誰でもないこの俺だよ。千兩の金をお前にとどけさせたのも、やつぱり

この俺だよ。して見ると、俺はどうしても國王陛下に相違ないから、とにかく取り抑へませう。」

かう言つて、彼はすつくくと立ち上がりながら、ありあふ木の枝を取つて、さんくんに母親を打ち据ゑました。母親はひどく聲を擧げて泣き叫びました。が、彼はそれに顧着しないで、どんく彼女を打ち据ゑました。とうく近所の人などが彼女の泣き聲を聞いて仲裁に遣入つて來ました。が、彼はなほも母親を打ち据ゑながら、

「この狸婆アめ。まだ俺を瞞さうと思つてやあがるな。俺は畏れ多くもこの國の國王陛下だ。お前のやうな奴に瞞されるかい。」と嗚鳴つてゐました。

近所の人々はそれを聞いて、顔を長くしながら、互に顔を見合はせました。

「どうです、これは？、ハサンさんもいよく氣が違ひましたかな。」

「さうですな、どうしても氣違ひに相違ありまへんな。」

「どうしませう？」

「どうしませうつて、お母さんをこのまゝ打たせても置かれ

ないから、とにかく取り抑へませう。」

かう言つて、皆がよつてたかつて、ハサンを後手に縛り上げてしまひました。それから彼を癡癡病院へ引き渡しました。癡癡病院では、何と言つても彼を氣違ひにしてしまつて、苦しい歌な藥を吞ませた上、鞭で引つばいたり、靴で蹴つたり、いろんな體罰を加へました。かうして彼は着物を引つ裂かれ、皮肉を破られて、ところく血みどりになつたあけく高い窓が一つしかない、狭い部屋へ抛り込まれて、鐵の鎖で首を繋かれたまゝ、十日間ほど捨て置かれました。

その後お母さんが病院まで見舞ひに來られました。彼はお母さんの顔を見るといきなりその手に縋りついて自分のみじめな境遇をいろくと訴へました。お母さんはそれを聞いて「だから言はないことぢやありませんよ。お前さんが本當に國王陛下なら、こんな所へ入れられて、こんな目にあふ筈がないぢやありませんか。そこへ氣が附いたら、どうか一日も早く心を入れかへて、正氣に歸つて下さいよ。」と、懇々説いて聞かせました。

した。

「なるほどお母さんの仰しやる通りだ。」と、ハサンは頸垂れたまゝ、しほくとして言ひました。

「私はどうも夢を見てゐたらしいですよ。夢の中で國王陛下になつて、多くの侍従や腰元どもに取りまかれてゐたんです。ですが、もう夢はすつかり醒めましたから、どうか一日も早くこゝから出られるやうにして下さい。」

お母さんはわが兒の正氣にかへつたのを見て、大層喜びま

「えゝ、私もこれからは氣をつけて、きつとこんな事のないやうに致します。」



かう言ふやうに、ハサンは固く將來を誓ひましたので、お母さんも近所の人々に頼んで、瘋癲病院から出られるやうに取り計つてやりました。

四

病院から出たハサンは、先づ錢湯へ行つて、よく體の垢を落しました。それから久しぶりに家の食卓に向ひましたが、いくら珍味佳肴を並べても、一人で喰べるのは、どうも彼には面白くありませんでした。

「ねえ、お母さん。」と、彼は母親に向つて話しかけました。

「一人者と、一人で飯を喰べるのは、どちらも餘りいゝものぢやありませんね。」

「まあ、何を言ふのだね」と、母親は相手を窘めるやうに言ひました。「お前さんがそんな了簡で、元のやうな氣儘を始めたら、きつと又瘋癲病院へつれて行かれますよ。」

が、母親の言葉などは耳にもかけないで、彼は又酒の相手をつれて来るために、例の橋の上へ出かけて行きました。そして、欄干に腰かけながら待つてゐると、どうでせう、そこへ又王様が商人に變裝してやつて來られました。ハサンを宮

中から送り返して後、毎日のやうにこゝへやつて來られたのですが、今日まで彼に會へなかつたのでございます。で、ハサンは相手の顔を見るや、すぐに大きな聲で罵りました。

「や、ようこそいらつしやいましたね、この魔法使ひめ。そんな眞面目な顔をしてゐたつて、もう今度は瞞されなさいぞ。」

「はゝあ、私があなたにどんな悪いことをしましたかね。」と王様はおちついてお尋ねになりました。

「おい、いゝ加減にとほけるなアよせやい。」と、ハサンは腹立ちまぎれにつけ／＼言ひました。「どんな悪いことをしましたかだと？お前さんが私にしてくれたよりも悪いことがこの世に又と一つあるかい。本當にいま／＼しい魔法使ひだな。私はお前さんのお蔭で、瘋癲病院へ入れられて、打つたり蹴つたりみんなから氣違扱ひにされたんだよ。それをどうしてくれるんだい？私はお前さんを自分の家へつれて行つてありつたけの御馳走を出して、一生懸命に變應して上げたばかりだよ。それだのにお前さんは、その後で私を惡魔の手へ渡して、朝から晩までさんざ私を玩具にさせたぢやないか。えゝもうお前さんのやうな人には、こつちは用がないからど

こへでもさつさつと行つてしまつて下さい。」

「まあ、さう仰しやるものでない。」と、王様は笑ひたいのを抑へながら、物靜に言はれました。

「きつと何でせうよ、私たちがお宅を出る時に、表の戸に錠をかけることを忘れて置いたから、それで惡魔がそこから飛び込んで來て、あなたにそんないたづらをしたのでございませうよ。」

「何で表の戸を開け放しにして置いたのです？それからして

よくないですよ。」

「だつて、わざ／＼明け放しにして置いた譯ではないから、勘辨して頂く外ない。とにかく」と、王様は急に話しの調子を變へながら續けられました。

「さういふ災難にいくつも出遭ひながら、かうして無事に戻つて來られて、再びこゝでお目にかゝれると言ふのは、目出た話ぢやありませんか。あなたのためにお祝ひ申しますよ。」

「いや、再びお目にかゝらうとどうせうと、私はもう二度と



あなたを家へつれて行くやうな眞似はいたしませんよ。」とハサンはそんな手に乗るものかと云ふやうな態度で言ひました。「世の諺にも、一度石に躓いて、二度又そこへ戻つて行く奴は馬鹿だと言ひますからね。私はもうあなたとは友だちになることも厭なら、一緒に酒を飲むことも嫌ひです。そんなことをしたら、どうせ後でろくなことがないのは知れきつてゐますからね。」

「あなたはさう仰るが。」と、王様はやつぱりにこくしなから言はれました。「とにかく私があつたればこそ、あなたもあのお隣りの住職をへこまして、かねての鬱憤を一度に晴らすことが出来たんぢやありませんか。」

「それはさうです。」と、ハサンは正直に答へました。

王様はそこへ附け込んで言はれました。

「ねえ、あなたがもう一度私のいふことを聞いてくれたら、前よりももつと好いことがあなたの身に起るでせうよ。」

「で、それはどうするんです？」とハサンは聞き返しました。

「私はたと今夜もう一度あなたのお宅へ招待されたいのですよ。」と、王様は静にお答へになりました。

ました。そして、それをハサンの前へさし込まれました。

「あなたの御無事を祝つて一つさしあげますよ。どうかぐつと乾して下さい。」

「え、頂戴しますとも。」ハサンはその盃を受けて、一息に飲み乾しましたが、それが胃の腑へ納まるか納まらないうちに、がつくりと足の前へ倒れてしまひました。

それから王様はすぐに立ち上がつて、従者どもに命じて、ハサンを再び宮殿へ搬んで行かせました。そして、前と同じ

それを聞いて、ハサンはしばらく思案してゐましたが、

「いや、かう言ふことにしませう。」と言ひ出しました。

「あなたが今度は誓つて、あの悪魔どもに私を玩具にさせないと言ふことを約束して下さいましたら、私は喜んであなたがたを御案内いたしますよ。」

「え、固く約束しますよ。」と王様もお答へになりました。

そこで再びハサンは王様と従者二人とを自分の家へ案内して、ありつたけの御馳走を並べて、三人を饗應しました。白や赤の葡萄酒も澤山に出ました。一同はだんく陽氣になつて來ました。殊に主人のハサンは人一倍好い心持ちになつて、

「ねえ君、僕にやどうしても譯が分らないんだよ。」と、王様に向かつて、くだを巻きかけました。

「さうぢやありませんか。僕はかう見えても、一度は國王の位についたんですぜ、玉座に上つて堂々と國王の權威を實行しましたよ。いえ、夢ぢやない。誰が何と言つてもあれは夢ぢやありませんよ。」

「でも頭の疲れた時にはいろんな夢を見るものですからね。」かう言ひながら、王様は麻酔劑をそつと盃の中へ落とされ

やうに自分の寢臺に寝かせました。それからなほ腰元どもに言ひつけて、眠つてゐるハサンを取り巻きながら、その眠りを覺まさぬうちに、しづかに笛だの、琵琶だの、羯鼓だのを奏させました。そして、自分は帷帳のうしろへ隠れて、やうすを窺つてゐました。

あけがた近くハサンは漸く目をさしましたが、いつになく妙なる樂の音が聞えてゐますので、自分ながら不安になつて參りました。で、聲を舉げて、



「お母さん。」とよんで見ました。

すると、大勢の腰元どもが彼の前に跪いて、

「わが君、お目覚めでいらせられますか。」

「わが君、よい朝でございます。」

「わが君、何御用でございますか。」と、口々にしやべりました。それを聞いて、彼は思はず聲を擧げて泣き出しました。

「あゝ、こら助からない。とんだことになつてしまつた。今度ときつと前よりも一層ひどい目に遭はされるだらうよ。」

かう言つて、彼は自分が瘋癲病院へ入れられて、毆つたり蹴飛ばしたりされたことを思ひ出しました。そしてその時受けた答の痕をそつとさすつて見ました。それから腰元や侍従どもを一巡見廻はしながらちつと考へ込んで居ましたが急に傍に居た一人の侍従を見返りながら、

「たい俺は眠つてゐるのか、それとも起きてゐるのかね。」と言ひ出しました。

「それはつきり分るやうに、お前、一つこの耳朶を思ひ切り噛んで見てくれないか。」

「どう仕りました。」と、その侍従はおそろく答へました。

「あなたさまは畏れ多くも國王陛下でいらせられますもの、どうして私などがあなたさまのお耳を噛まれませう。この儀ばかりは、どうぞ御免なされて下さいませ。」

「俺が國王なら、なぜ俺の命に従はないのだ？ たつて従はないに於ては、即座にお前の首を刎ねてしまふぞ。」と、ハサンは大きな聲で唖鳴りつけました。

「はい、それでは噛みますでございます。」と、侍従はあわてゝ言ひました。そして、ハサンの後へ、通りながら、上下の齒がちりと出會ふほど、烈しくその耳を噛んでやりました。すると、ハサンは思はず。

「きやッ。」と悲鳴を上げながら飛び上がりました。

それを聞いて、前に居並んでゐた腰元や侍従を始め、帷幄のうしろに隠れてゐた王様まで、われを忘れて大笑ひに笑ひました。そして、笑ふ中から、その耳を噛んだ侍従に向つて「こら、その方は氣違になつたのか。陛下のお耳を噛むなんで、どうしたのだ？」と、口々に叱りつけてゐました。

一人ハサンは泣き出しさうな顔をしながら、一同の者に向つて言ひました。

「おい、お前だちも、これだけ俺をひどい目にあはせたら、もう澤山ぢやないか。好い加減に勘辨し家へ歸してくれよ。いやお前方が悪いのぢやない、悪いのはお前方の親分のあの魔法使ひなんだよ。だから、決してお前方を恨みはしないから、早くかへしてくれろよ。」

それを聞いて、帷幄のうしろに隠れてゐた王様は腹をかゝへてお美ひになりました。そしてその後から出て來ながら、

「いや、ハサンよ、お前は本當によく俺を笑はせてくれた。

このまゝでつゞけばしほひには殺されるかも知れないよ。」かう言つて、王様は又一しきりお笑ひになりました。そこで始めてハサンも、自分の家へ招待した旅人が誰であつたかと言ふことを悟りました。で、床の上に額を擦りつけながらこれまでの無禮を陳謝しました。王様もいゝ機嫌で、即座に時服一襲ねと黄金二千兩とを取り出して、ハサンに賜はりました。なほこの後はハサンを宮中の道化役に召し抱へると言ふことのでございました。

(をばり)

